コミュニケーション能力の向上

―「演劇ワークショップ」の授業の導入―

本文編

3年B組1番　今坂楓子

目次

第0章　アブストラクト・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3

第1章　序論・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3

1.1　コミュニケーション能力の現状・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3

1.2　社会の中でのコミュニケーション能力・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3

　　1.3　義務教育でコミュニケーション能力の取り方を学ぶ機会・・・・・・・・・・・3

　　1.4　演劇の特長・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4

　　1.5　自分の体験・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5

第2章　本論・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5

論証1：演劇ワークショップ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5

　　　　　1.1　内容・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5

　　　　　1.2　演劇ワークショップについてのインタビュー・・・・・・・・・・・・・6

　　反証1・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6

　　論証2：「演劇ワークショップ」の授業・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6

　　　　　2.1　義務教育に導入する理由・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6

　　　　　2.2　教員・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7

　　　　　2.3　カリキュラム・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7

　　　　　2.4　評価・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9

　　　　　2.5　他校との交流・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9

　　反証2・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10

　　論証3：演劇ワークショップの効果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11

　　反証3・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12

第3章　結論・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12

　　3.1　演劇のもたらす効果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12

　　3.2　今後の展望・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12

第0章　アブストラクト

　私が注目した問題は、義務教育でコミュニケーション能力の向上を一番の目的とした授業がない、ということである。明らかにしようとしたことは、コミュニケーション能力を高めるにはどうすればよいか、ということである。今回の研究で主張したいことは、義務教育に「演劇ワークショップ」の授業を導入することである。この主張の根拠は三つある。一つ目は、演劇ワークショップは一人一人の個性を尊重しながら言葉やコミュニケーションに興味を持ってもらい、生活に役立つことを見つけてもらう場だからである。二つ目は、週に一度、授業として演劇ワークショップを行うことで、年に数回実施するときよりも深くコミュニケーションの取り方や言葉の伝え方について学ぶことができるからである。三つ目は、観劇や劇作りに参加することで他者について、さらには自分の言葉の伝え方を学ぶことができるからである。

1. 序論
   1. コミュニケーション能力の現状〉

　コミュニケーション能力とは、自分の考えや意見を他者に正しく伝え他者の言葉を正しく理解する力のことである。高等学校を中途退学する理由に、人間関係をうまく保てないなどの人間関係をめぐる問題が挙げられることが多い（註１）。また、大学等で行われている学生相談では、対人関係に関する内容が増加している（註２）。これらの事実から、近年コミュニケーションを取ることや人間関係を保つことを苦手とする人が増えているといえる。

* 1. 社会の中でのコミュニケーション能力〉

　ところが、企業が新卒採用の選考にあたって特に重視した点のアンケートで、八割以上の企業はコミュニケーション能力を重視したと回答した（註３）。さらに、コミュニケーション能力は職場などの中で多くの人々と仕事をするために必要な基礎的な能力とされる、社会人基礎力に含まれている（註４）。つまり、コミュニケーション能力は社会の中で生きていくために必要不可欠な力なのである。

* 1. 義務教育でコミュニケーションの取り方を学ぶ機会〉

　だが、義務教育である小学校・中学校でコミュニケーションの取り方、つまり自分の考えや意見を他者に正しく伝え他者の言葉を正しく理解する方法のみを学ぶための授業はない。道徳や国語などの授業でコミュニケーションの取り方を学ぶことができる場合もあるが、これらの授業はコミュニケーション能力向上を一番の目的としていない。中学校の道徳の授業の目的は、「自己の生き方を考え、主体的な判断の下に行動し、自立した人間として他者と共によりよく生きるための基盤となる道徳性を養うこと」である（註５）。小学校の道徳の授業でも同じ目標を掲げられている（註６）。道徳の授業では、命の尊さや規則を守ることの大切さ、そして他者との関わり方など、道徳性を養うために様々な事柄を学ぶ必要がある。そのため道徳教育の中でコミュニケーション能力を高めるための授業を行うことは少ない。他者との関わり方を学習することに多くの時間を割けないからだ。そのため私達は友人との会話などからコミュニケーションの取り方を学ぶことになる。しかし、それでは内向的・外向的といった個人の性格によって学び方に差ができてしまうのではないか。私は、コミュニケーションの取り方を小学校・中学校の児童・生徒全員で学ぶことはできないかと考えた。そこで役立つのが演劇だ。

* 1. 演劇の特長〉

演劇とは、舞台などで何かを表現することである。北海道札幌市では、札幌市で生まれ育った演劇作品の長期公演を行う「演劇シーズン」というイベントが年に二回開催されている。「演劇シーズン」を開催している、演劇シーズン実行委員会事務局の三上氏に演劇がもたらす人への影響を伺った。「演劇を観ることで日常生活では見えなかったことが見えるようになる。そして、観劇中や劇を見終わった後には、日常生活とは違った、普段は意識していない事柄を意識し考える時間が持てることで、観劇前と観劇後で考え方に多少の変化をもたらすことができる。」

また、北海道札幌市にある、札幌市子どもの劇場「やまびこ座」、札幌市子どもの人形劇場「こぐま座」という二つの劇場の館長を務める矢吹氏にも、演劇がもたらす人への影響を伺った。「自分で役を演じることで豊かな感情を体感できる。また、観劇によって何かが心に残り、そこから何かを学び取れる。劇作りに参加すれば、劇作りを通して色々な人との関わり方を学ぶことができ、一つのものをみんなで作る感動も味わえる。」

演劇の携わり方は大きく分けて、観劇をすることと劇作りに参加することの二種類がある。観劇することにより、他者の演技や表現方法を通じてその人の普段は見ることのできない一面を知ることができ、観る前後で考え方が変わる。観劇することは他者について知るための有効な手段だといえる。また、演劇づくりに参加すれば、豊かな感情を体感でき、他者との関わり方を通して自分の言葉を他者に伝える方法を学ぶことができる。つまり、観劇や演劇作りに参加するという形で演劇に携われば、他者について知ったり、自分の言葉の伝え方などについて学べたりするのだ。演劇以外のコミュニケーション能力向上のために利用できそうな表現活動は数多く存在する。音楽鑑賞によって何かを得ることができたり、スポーツをすることにより仲間と感動を味わえたりすることも事実である。しかし、演劇でしか体験できないことも多い。演劇の持つこれらの特長を私は身をもって体感した。

〈1.5　自分の体験〉

私は小学生の頃から、他者に自分の言葉を伝えたり、他者の言葉の行間を読み取ったりすることが苦手だった。そんな私だったが、小学校六年生頃から演じることに興味を持ち始めていた。小学校を卒業した私は、中学校に入学してすぐに演劇部に入った。そして演劇を観て仲間と一つの演劇を作るようになってから、私は変わった。他者と関わり、自分からコミュニケーションが取れるようになったのだ。

以上から私は、演劇を通して小学校・中学校の児童・生徒のコミュニケーション能力を高めるために「演劇ワークショップ」の授業を行うことを主張する。

1. 本論

論証1：演劇ワークショップ

〈1.1　内容〉

演劇ワークショップは平田オリザ氏によって「演劇を体験することを通じて、言葉やコミュニケーションや人間の動作などに興味・関心を持ってもらい、自分の専門領域や普段の仕事に役立つことを見つけてもらうもの」と定義されている（註７）。仕事に役立つこととは、具体的に言うと他者の話を聴いたり他者を感動させたりする術などのことを指す。演劇ワークショップに参加することで見つけられる、仕事に役立つことは人によって様々だが、いずれも他者と良い関係を築くために必要なことである。

また、平田オリザ氏は「演劇ワークショップには参加者のそれまでの人生をまず尊重する」ものだとも言っている（註８）。つまり、演劇ワークショップは一人一人の個性を尊重するものなのである。一人一人の個性を殺すことなく、コミュニケーション能力を高められるということは、演劇ワークショップの魅力のひとつだ。つまり、演劇ワークショップは、演劇というものを通して個性を尊重しつつ、コミュニケーション能力を高めるための場なのである。

〈1.2　演劇ワークショップについてのインタビュー〉

北海道札幌市を拠点として活動している劇団札幌座は演劇ワークショップを積極的に開催している。札幌座の演劇ワークショップでは主にパントマイムなどの演劇要素のあるゲームや演劇作りを行っている。劇団札幌座を運営している北海道演劇財団の横山氏にインタビューを行った。参加者への効果について「心が開かれ自己主張ができるようになり普段の生活とは違った一面が出せることである。長期的に継続して行えば自分の表現力を高めるだけではなく、相手の言い分にも耳を傾けられるようになるだろう。さらに、劇の中で役になりきり演じることで生活の中で体験できないことを擬似体験できる。擬似体験によって様々な状況に対応するための訓練ができる。」と語った。

以上のことから、演劇ワークショップは一人一人の個性を尊重しながら言葉やコミュニケーションに興味を持ってもらい、生活に役立つことを見つけてもらう場であるため、コミュニケーション能力を高めるために効果的だといえる。

反証1

　確かに、個性が他者とコミュニケーションを取らないことだという児童・生徒もいるだろう。しかし、コミュニケーションを取らない個性を持っている児童・生徒だからといってコミュニケーションの取り方を学ぶ必要がないわけではない。そのまま成長し、コミュニケーションを取らなくていい仕事に就けば、コミュニケーション能力は必要ないかもしれない。だが、コミュニケーションの取り方を知らなければ、コミュニケーションを取ることが要求されるような状況に陥った時に対応できないだろう。どんな人でも、一生の中でコミュニケーションを取ることが要求されないとは限らないのだ。そんな時にコミュニケーションの取り方を学んでこなかったせいでうまく対応できないという事態は避けなければならない。

論証2：「演劇ワークショップ」の授業

〈2.1　「演劇ワークショップ」の授業を義務教育に導入する理由〉

「演劇ワークショップ」の授業は全ての小学校・中学校で週に一時間行う。義務教育である小学校・中学校で行うことで、より多くの児童・生徒のコミュニケーション能力を向上させることができるからだ。義務教育は「個人の能力を伸ばし、社会的自立の基礎、国家・社会の形成者としての基本的資質を養うことを目的としている」⁽註９）。義務教育に、コミュニケーション能力を向上させるための授業を導入することで、義務教育の目的である、社会的資質を養うことにつながるのではないか。

「演劇ワークショップ」の授業は、土曜授業のない小学校・中学校では土曜日に行う。公立学校において、当該学校を設置する地方公共団体の教育委員会等が必要と認める場合は、土曜日等に授業を実施することが可能である⁽註１０）。土曜日に授業がある小学校・中学校の場合には、教科数の少ない日や土曜日に一時間授業を増やして「演劇ワークショップ」の授業を行う。

〈2.2　教員〉

教育委員会に専門の教員を置き、毎週「演劇ワークショップ」の授業の時間だけ各学校で指導を行う。この教員は、演劇ワークショップを積極的に行っている人や団体から選ぶが、選考方法については熟考を重ねる必要がある。教育委員会から派遣された専門の教員がプログラムを決めるため、全国の小学校・中学校の進度や取り組みを概ね統一することができる。児童・生徒が何らかの理由で転校することは少なくないだろう。授業の進度や教え方が転校前の学校と転校先の学校で違う場合も考えられる。しかし、教育委員会で全国の小学校・中学校の「演劇ワークショップ」の授業の進度や取り組みを統括するため、教え方の違いなどにより大きな混乱が生じることを防げる。プロの劇団を継続して呼ぶことは難しいが、プロの劇団から学ぶことも大切な経験である。現在、年に数回劇団を呼び、演劇ワークショップを開いている学校は少なくない。そこで、年に数回、プロの劇団に講師として来てもらい、普段の授業で学んだことをより深める時間を設ける。来てもらう日程は劇団側の都合に合わせ、頻度も各劇団の事情を考慮する。週に一時間ある「演劇ワークショップ」の授業では学びきれない細かな部分を、劇団が来ることによって的確に学び取ることができる。専門の教員とプロの劇団、二種類の講師に来てもらうことで、全国の小学校・中学校の児童が均等にコミュニケーション能力を向上させる機会を得られるだろう。

〈2.3　カリキュラム〉

「演劇ワークショップ」の授業では、発声練習などの基本的な練習から、自分達で台詞や動作を考え脚本を作り、最終的には発表までを行う。小学校六年間の「演劇ワークショップ」の授業では、大きく分けて三つのことを行う。一つ目は身体と緊張をほぐし、他者を知るためのゲームである。例えば、ペアを作り互いに自己紹介をした後で、全員に対して自分のペアのことを紹介する他己紹介というゲームが挙げられる。ゲームはこの他にも小学校低学年でも楽しめるものから、少し思考しながら行うものまでを幅広く取り揃える。前に出て話すことが苦手な児童・生徒でも積極的に参加したいと思えるような工夫をしなければ、「演劇ワークショップ」の授業の目的である、コミュニケーション能力向上は一部の児童・生徒にしか望めないと考えられる。参加する児童・生徒全員が積極的に授業に参加するために、身体と緊張をほぐすためのゲームは必要不可欠である。堅苦しい雰囲気ではなく、遊びのような雰囲気で様々なゲームを行うことで、緊張が緩和され体を動かすことに抵抗がなくなり、お互いのことをもっと深く知られるだろう。

二つ目は発声練習などの基本的な練習である。発声練習の目的は、声の出し方や大きさを変えることで他者へ言葉の伝わり方がどう変化するかを知ることである。児童は発声練習を通して、声の出し方や大きさも表現方法の一つであり、他者とコミュニケーションを取る上で重要だということを学べる。表現方法とは、演劇で使用する身体の動かし方や台詞の言い方だけでなく、他者に何かを伝えたり他者の言葉に耳を傾けたりする方法なども指す。そのため表現は演劇などの発表の場合だけでなく、生活の中で誰もが行っていることなのだ。つまり、表現方法を学ぶことは生きていく上で必要なことといえる。

三つ目は五人ほどのグループでの劇作りである。各グループに同じお題を与え、一時間の中で短い劇を作る。その時間の最後には全てのグループが発表し、互いに観劇しあう。自分達のグループでは思いつかなかった表現方法などを学ぶとともに、少人数での劇作りの中で他者の新たな一面を知り自分の意見の伝え方を習得できる。また、役を演じることで、劇の中で起こったことを擬似体験できる。現実では体験できないことも劇の中では演じられるため、生活の中では知ることのできない自分の一面を見つけられる。グループでの劇作りは、自分と他者を知るきっかけになるだろう。この三つの活動を行うことにより、表現方法を学習し、他者と自分について知ることができる。

小学校一、二年生の「演劇ワークショップ」の授業では、他者とコミュニケーションを取ることを楽しいと感じてもらうためにゲームと基本的な練習を中心に行うが、劇作りにも年に数回程度取り組む。ただ、劇作りについては児童の状況を見ながら臨機応変に対応する。小学校三年生からは徐々に劇作りの回数を増やし、小学校五、六年生の「演劇ワークショップ」の授業では月に一時間は劇作りの時間に設定する。劇作り以外の「演劇ワークショップ」の授業では、ゲームや基本的な練習のほかに、プロの劇団の演劇ワークショップで行われていることを取り入れ、児童が毎時間飽きずに楽しめる工夫をする。

中学校三年間の「演劇ワークショップ」の授業では小学校で行う三つの取り組みに加え、本格的な脚本作成に取り掛かる。つまり、発表用の脚本を生徒達が主体となって作るということである。なお、「演劇ワークショップ発表会」という場を新たに設け、劇の発表を行う。中学校では、文化祭などの劇や音楽を発表する場が年に一度設けられていることが多いだろう。文化祭などで発表する劇の脚本を生徒が書くことは稀にある。しかし、一部の生徒だけで書くことが多く、クラスの生徒全員で脚本を作成しているとは言えない。また、文化祭ではすべてのクラスが劇を発表するわけではない。文化祭で「演劇ワークショップ」の授業で作った劇の発表を義務付けてしまうと、クラスの本当にやりたかったことができなくなるだろう。そこで「演劇ワークショップ発表会」という、「演劇ワークショップ」の授業で作った劇だけを発表する場を作ることで、児童・生徒は劇の発表に向けて集中することができる。「演劇ワークショップ」の授業の中の劇作りでは、グループごとの話し合いに時間をかけられるため、一人ひとりのアイデアを盛り込むことができるだろう。小学校で学んだことを踏まえ、中学校では自分の意見を相手に伝え、表現方法などの学んだことを活かすことができる。

〈2.4　評価〉

また、「演劇ワークショップ」の授業の児童・生徒に対する出席点以外の評価はつけない。正式な授業であるのに出席点以外の評価をつけない、というのには理由がある。「演劇ワークショップ」の授業の試験を作るとしたら、コミュニケーション能力が向上したか測ることができる試験が必要だ。しかし、コミュニケーション能力という力が定着したかどうかを測る試験を作ることは容易なことではない。また、採点基準も問題となる。正しいコミュニケーションの取り方の定義を決めることはとても難しいからだ。さらに、正解を統一してしまうと正解に縛られてしまい、一人一人の個性を伸ばしながらコミュニケーション能力向上を目指すことができなくなることも考えられる。つまり、試験で点数がついても、その点数がコミュニケーション能力の定着度を示すとは言えない。その上、問題や採点基準が曖昧になったり、点数化することで個性が失われたりする恐れがある。これらの理由から「演劇ワークショップ」の授業の児童・生徒に対する出席点以外の評価はつけない。

〈2.5　他校との交流〉

また、一年に一回程度、他校との交流の機会を設ける。他校との交流では、近隣の小学校・中学校が集まり、それぞれが授業で作った劇を発表し合う。交流する学校は、小学校同士、中学校同士などの決まりは作らずに日程が合う、同じ教員が担当している学校と行う。他校との交流により、他校の児童・生徒がどのような表現方法を身につけているのかを知り、自分の言葉で考えを伝える機会が増える。さらに、違う学年同士の交流なら上級生の発表を見ることによって、下級生の学習意欲の向上が期待できる。他校との交流により、初めて会う人との関わり方を学ぶことができる。

以上のことから、週に一度、授業として演劇ワークショップを行うことで、年に数回実施するときよりも深くコミュニケーションの取り方や言葉の伝え方について学ぶことができるため、「演劇ワークショップ」の授業はコミュニケーション能力の向上に効果的だといえる。

反証2

確かに、高等学校でも「演劇ワークショップ」の授業を行うべきかもしれない。しかし、高等学校は、「義務教育とは異なり、個人の意欲・能力等に応じて進学が選択されるものであり、入学時点及び卒業時点における個々の生徒の能力・適性・進路等に応じて高等学校の在り方が多様化している」⁽註１１）。つまり、各学校で学んでいることが違うため、全ての高等学校に一様に「演劇ワークショップ」の授業の導入することは容易ではない。高等学校では取得すべき単位数が定められていて、他の教科の時間を使用することができない。さらに、土曜日に授業がない高等学校では土曜日も模擬試験などで時間が取られることもある。そのため、高等学校で小学校・中学校と同じように週に一時間、時間を確保することは難しい。以上の理由から、高等学校で「演劇ワークショップ」の授業は行わない。

確かに、年に数回、劇団が学校に来て演劇ワークショップを開催する学校があるため、それだけでも十分かもしれない。しかし、私はもっと演劇ワークショップを行う頻度を増やすべきだと考える。なぜなら、年に数回だけだとその場限りの能力しかつかない可能性があるからだ。週に一時間、「演劇ワークショップ」の授業という形で小学校・中学校合わせて九年間、継続して行うことで、表現について考える機会が増えるため、週に一時間「演劇ワークショップ」の授業を設けることは必要である。

確かに、学校外で習い事として演劇ワークショップを行えばいいかもしれない。しかし、「劇団札幌座は学校以外の場所で演劇ワークショップを開くこともあるが、自由参加にすると人はなかなか集まらないのが現状だ」と北海道演劇財団の横山氏は語った。人が集まらない原因はいくつかあるが、原因の一つとして、人々の演劇ワークショップへの関心の低さが挙げられると考えられる。演劇ワークショップへの関心や知名度が低いため、演劇ワークショップを習い事として定着させることは難しいだろう。「演劇ワークショップ」という教科をつくることで、学校外でイベントを開いたときより多くの児童・生徒の参加が期待できるため、「演劇ワークショップ」の授業を導入するべきである。

確かに、様々な事情により「演劇ワークショップ」の授業を小学校・中学校の九年間継続して受けることができずコミュニケーションの取り方を学べないかもしれない。しかし、「演劇ワークショップ」の授業は、表現方法などを身につけるための授業であり、専門的な知識や技能を身につけるための授業ではないため、一時期しか授業を受けていないからといってコミュニケーションの取り方を全く学べないということはない。一回でも授業を受ければ、その授業の内容からコミュニケーションの取り方を学ぶことはできるからである。

確かに、近隣に小学校・中学校がないため交流ができない学校もあるだろう。しかし、そんな小学校・中学校も他校との交流が必要なため年に数回、一番近くの小学校・中学校に行って交流をする。授業時間は夏休みや冬休みを削り作る。

論証3：演劇ワークショップの効果

近年では、学生のコミュニケーション能力向上を目的として演劇ワークショップの授業を行う大学も増えている。一橋大学や帝京大学短期大学、京都精華大学などのゼミ教育に演劇ワークショップは取り入れられている。一橋大学によって、「即興演劇を教育手段として用いることで、仲間との関わり方、物語の作り方、演技などを学び最終的には劇場での公演を行う。それによって、うまく人間関係を作れなかった学生がコミュニケーション能力について学び、人間関係と居場所を作ることに成功している。」という報告がされている⁽註１２）。

また、兵庫県伊丹市の小学校では言葉科というものが作られ、週に二時間、国語以外の言語活動が行われている。この授業のおかげで、市内に数校あった学級崩壊がゼロになった。学級崩壊とは、児童や生徒の私語などによって授業が成立していない状態を指す。さらに、廊下で寝転がっている生徒がいた市内の中学校にも言葉科を導入すると、言葉で表現ができるようになったため廊下で寝転がる生徒がいなくなった、という報告もされている⁽註１３）。

さらに、平成23年に文部科学省の「コミュニケーション教育推進会議」は諸外国の学校で行われているワークショップ型の授業がコミュニケーション能力を育成するのに有効な手段だと報告した⁽註１４）。「コミュニケーション教育推進会議」は平成22年に文部科学省によって設置された、子供のコミュニケーション能力を育てるための方策について議論する場である。この会議の平成23年の審議経過報告書の中で、実際に小学生を対象にして行われた六つのワークショップのうち、五つが演劇ワークショップであった。そして演劇ワークショップを行った結果、児童のコミュニケーション能力が向上したことを報告した⁽註１５）。例えば、普段は見ることのできない他者の一面を見いだしたりしたことで、他者と自分について深く認識できるようになったことが挙げられている。さらに、言葉だけでなく身体も使って表現をすることに喜びを覚え、自分の言葉を伝える力が向上したことも演劇ワークショップの効果として挙げられている。

以上のことから、観劇や劇作りに参加することで他者について、さらには自分の言葉の伝え方を学ぶことができる演劇ワークショップを授業として行えば多くの児童・生徒のコミュニケーション能力を向上させられるだろう。

反証3

　確かに、「演劇ワークショップ」の授業で全ての児童・生徒のコミュニケーション能力を向上させられるわけではないだろう。この授業を行っても、どうしても他者とコミュニケーションを取ることが苦手な児童・生徒は、コミュニケーション能力を向上させることができないかもしれない。しかし、学んですぐに効果が出なくても、他者とのコミュニケーションの取り方を学ぶことで、その後の人生でその学びが活きる場面が来るだろう。そのため、授業を行ってすぐにコミュニケーション能力の向上が見られなかったとしても、その後の人生のためにコミュニケーションの取り方を学ぶことは必要である。

第3章　結論

〈3.1　演劇のもたらす効果〉

　北海道演劇財団の横山氏は、演劇が人に与える影響についてこう述べた。「演劇は生で見ることによって、出演者の言葉や表現が直接届きやすい。演劇は総合芸術である。演者だけでなく、照明や音響、舞台監督などの裏方の仕事もあるため、皆で取り組みやすく、色々な関わり方をすることができる。演劇ワークショップという形で演劇を身近に感じる機会がある。」

　演劇は、役を演じる人がいるだけでは成り立たない。裏方と呼ばれる、照明や音響、脚本や演出、舞台監督など、多種多様な役割があるため多くの人が関わり、その一人一人が責任をもって自分の仕事を最後まで全うしなければ劇は完成しない。自分の仕事をしっかり行うとともに、他の役割の人々とも話し合いをしなければならない。実際に私は、ある作品では演者を、またある作品では裏方を務めた経験がある。どちらの仕事も部員と話し合い、疑問や自分の意見を伝えることがとても重要だった。話し合いを重ねるごとに、作品がより良いものになっていき、部員全員で作っているという実感ができたからだ。

〈3.2　今後の展望〉

　現在、コミュニケーション能力を高めることが一番の目的である授業は、義務教育にはない。コミュニケーション能力が求められている今こそ、早い段階からコミュニケーション能力を育み高める必要がある。コミュニケーション能力を育むのが早ければ早いほど、より多くの人々と関わることができる。小学校・中学校で「演劇ワークショップ」の授業を行うことで多くの児童・生徒のコミュニケーション能力を向上させることができるだろう。「演劇ワークショップ」の授業で育んだコミュニケーション能力は、仕事や生活の中で発揮され、児童・生徒の今後の生き方を変える力となるだろう。さらに、「演劇ワークショップ」の授業でコミュニケーション能力を向上させることで、現在起こっている学校の様々な問題を解決する糸口になるのではないか。

　以上のことから、私は、児童・生徒のコミュニケーション能力を向上させるために、義務教育に「演劇ワークショップ」の授業を導入するべきだと考える。